

「ソロモン、ヨナにまさる」

2015年08月11日

ルカによる福音書 11章 29節～32節。 群衆の数がますます増えてきたので、イエスは話し始められた。「今の時代の者たちはよこしまだ。しるしを欲しがすが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。つまり、ヨナがニネベの人々に対してしるしとなったように、人の子も今の時代の者たちに対してしるしとなる。南の国の女王は、裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。また、ニネベの人々は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。」

主イエスの周りには、いつも飢え渴いた民衆が押し寄せて来た。そこで話し始めた。「今の時代の者たちはよこしまだ。しるしを欲しがすが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。」人は苦境にある時、苦境から抜け出せる奇跡を求める。民衆は皆、これを求めて主イエスに群がっていたのである。彼らの心境は容易に理解できる。その中に、ファリサイ派の人々がいて、主イエスの病をいやし、悪霊を追放するしるしを見たけれども、本当にメシア（キリスト）であるならば、それ以上のしるしを見せよと迫った。彼らに対し、今の時代の者たちはしるしを求めるよこしまな者であると言い、ヨナのしるしの他には与えられないと語ったのである。ヨナのしるしとは何であるか。

旧約聖書のヨナ記は、神はイスラエル人だけでなく、神に敵対する異教徒も愛していると神の愛の普遍性を記したユーモラスな書物である。預言者ヨナに神はニネベに行って、神の裁きの言葉を語れと言われる。ニネベは北イスラエルを滅ぼした憎い敵民族の都である。ヨナはニネベなんかには行けないと、船に乗って逆方向のタルシシュに逃れた。船は嵐に遭い、ヨナは海に投げ込まれる。大きな魚がヨナを飲み込み、三日三晩、苦悩の中で神に祈る。魚から吐き出されたヨナはニネベに向かう。そして、この町は神の裁きを受け、滅ぼされると説教した。すると、王から民衆に至るまで皆、粗布をまとい灰の上に座して悔い改めた。悔い改めを見た神は裁きを止める。これを聞いたヨナは裁きの言葉が外れると、預言者として立ち行かないと怒り狂う。そのヨナに対し、神は「どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから」と告げる。偏狭な民族主義者たちに神の愛は全人類に及んでいると述べている。ヨナのしるしとは悔い改めをもたらすしるしであろう。人の子（メシア）である主イエスは、今の時代の者たちにとって悔い改めのしるしである。また、南の国のシェバの女王はソロモンの知恵を聞くために地の果てから訪ねて来た。そして、ソロモンの知恵に感嘆した。神の裁きがなされる時、悔い改めたニネベの人々、ソロモンの知恵に感嘆したシェバの女王は、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、しるしのみを求め、私の言葉に聞いて悔い改めないファリサイ派の人々を罪に定めるであろう。今、ここにヨナの悔い改めを求めた説教に勝り、ソロモンの優れた知恵に勝るものがある。それは、もちろん主イエスご自身である。

悔い改めは「向きを変える」ということであるが、本田哲郎神父は「低みに立つ」ことであると言っている。主イエスは低くされた者と共にあることを貫かれた。それに倣うことが悔い改めのしるしと受け止められる。